

# 旅行者かツーリストか？

十九世紀前半フランスにおける“touriste”の変遷

たぐちあき  
田口亜紀

## 1. はじめに

1837年にジョルジュ・サンドは『ある旅人の手紙』(*Lettres d'un voyageur*)を、翌年、スタンダールは『ある旅行者の手記』(*Mémoires d'un touriste*)を出版する。原題に含まれる〈voyageur〉も〈touriste〉も「旅する者」を意味する。

フランス語の「旅する者」(voyageur)はラテン語〈viaticum〉から生まれ、十五世紀初頭にはその使用例が見られる。「道(voie)を行く人」の意味で、十九世紀フランスでは一般的に用いられていた。「旅する者」がフランス語で〈voyageur〉ならば、英語では〈traveler〉だろう。ローレンス・スターンの『センチメンタル・ジャーニー』(1768)で主人公＝語り手はグランド・ツアーの旅程をなぞって、大陸旅行に出かけるが、作品の冒頭で旅行者〈traveler〉をいくつかのタイプに分類した。グランド・ツアー〈grand tour〉とは、英国貴族の子弟の教育の仕上げとして十七世紀から十八世紀にかけて行われた教養旅行で、イタリアとフランスで古典芸術と歴史に触れることが旅行の目的だった。1720年代には社会への通過儀礼として考えられるようになり、制度化されると、グランド・ツアーの旅行者は増加し、教養主義から個人の嗜好が旅の行程に反映されるようになる。

一方、英語文献に〈tourist〉の語が登場するのは1800年頃<sup>1</sup>であり、グランド・ツアーで養われた審美眼によって英国内の風景が「発見」され、英国内でも風景を愛でる旅人が増加すると、彼らも〈tourist〉と呼ばれるようになる。英語の〈tourist〉は〈tour〉を行う人(ist)を意味するが、その〈tour〉とは、ラテン語の〈tornus〉「ろくろ」から派生し、「一回り」つまり、出発して帰国する旅を指し、十七世紀から使用例が確認できる。放浪、追放、移住、戦争のための移動や困難な旅に対して、〈tour〉は帰国を前提とした旅であり、特に〈the tour〉あるいは〈grand tour〉を意味した<sup>2</sup>。フランス語の〈touriste〉は十九世紀に英語の〈tourist〉に〈e〉がついてフランス語化した「外来語」だった。

今日、フランス語の〈touriste〉は英語の〈tourist〉と同義で、「ツーリスト」、「観光客」、あるいは「観光者」と和訳され、フランス語では〈voyageur〉同様、普通名詞として流通している。では現代において、〈tourist〉(touriste)はどう定義されるだろうか。2008年の国際連合・世界観光機関によると〈tourist〉は「継続して一年を超えない範囲で、レジャーやビジネスあるいはその他の目的で、日常の生活圏の外に旅行したり、また滞在したりする人」であり、「訪問先で報酬を得る活動を行うことと関連しない諸行動を行う」。また、「観光学」や「観光文化学」の研究分野では、ツーリストの定義が様々に試みられている。観光旅行が人びとの余暇の一部となり、「趣味」となった現代社会では、誰でも〈tourist〉になりうるが、はたして自分が「ツーリスト」であることを誇るだろうか。現にフランス語の表現〈se comporter comme touriste〉、〈être là comme touriste〉、〈faire touriste〉、あるいはエコノミークラスの旧称である〈classe touriste〉からは、ツーリストは格下だというニュアンスが読み取れる<sup>3</sup>。団体旅行は羊の群れに例えられたり、パッケージ旅行への参加を商品購入という消費活動の一環とされたりして、「ツーリスト」には分が悪い。

それでは飛行機や鉄道を利用して気軽に旅が楽しめる現代とは旅のしかたが著しく異なった十九世紀前半、〈touriste〉が生まれた状況でそう呼ばれたのはどのような人だったのか、という疑問がわく。現代フランス語のコノテーションが、当時受容されていた属性や性質に一致するわけではない。〈touriste〉の語が辞書で定義され始めるのは十九世紀後半であるが、その定義を十九世紀前半の状況にそのまま当てはめるわけにもいかない。

辞書について見ると、〈touriste〉の語は、1872年のアカデミー・フランセーズの辞書には未所収であるが、1875年刊行の「十九世紀ラルース辞典」には登場している。それによると、「本質的にツーリストという種は暇人である。彼らが旅にでるのは旅の楽しみのためであり、〈旅をした〉と自慢するためである。酒飲みが酒をやめられないように、旅人は旅をやめられない。純粋なツーリストは美しい季節になると渡り鳥の季節に鳥が落ち着かないのと同じように、いてもたってもいられなくなる。目的地はともかく、とにかく旅立たなくてはならない。ひばりが戻ってくるように、ツーリストはアルプスとピレネーで列をつくる。年々ツーリストの数は増え、滞在先の様相を変えてしまう。ツーリストが行くところには宿屋が必要で、少なからずスコットランド風のもてなしでツーリストを迎えてくれる。例えばスイスでは毎年宿屋が増え、建物が増えていくので険しい山の頂上まで迫る勢いである。(…)住民は一つの生業しか持たない。ツーリストに飲食を提供することである<sup>4</sup>」。この定義は十九世紀後半に、近代観光が成立した状況を前提にしている。世紀後半には、産業革命の成熟、鉄道や蒸気船の発達、宿泊施設の増加、万国博覧会の開催、観光協会の設立、トーマス・クックによる団体旅行の開始などの要因によって、観光文化

が成り立ち、観光が人びとの間に浸透し、旅に対する意識が大きく変化した。その時期になされた〈touriste〉の定義を十九世紀前半の状況に当てはめて理解するのであれば、時代の認識を見誤る恐れがある。十九世紀前半には、世紀後半のように観光が制度化されているわけではなく、鑑賞の対象、コース、食事、宿、距離などの選択は旅行者にゆだねられおり、さらに旅行者というのは、巡礼者、修行者、商人、職人視察官、取材記者（文学者）、芸術家以外では、年金や地所からの収入で生活していた特権的な人間に限られていたのだ。

一方、1872年のエミール・リトレの辞書によると、〈touriste〉とは、好奇心と暇があって外国を巡る旅行者で、同国人によってよく訪問されている場所に行く人であり、特にフランスやスイス、イタリアにおけるイギリス人を指すと定義されている。これは〈touriste〉をフランス語に導入したときの意味をよく言い表している。それでは〈touriste〉はいつから、またどのような文脈でイギリス人以外の旅行者を指すようになったのだろうか。「ツーリストの歴史はツーリスト軽蔑の歴史である<sup>5</sup>」なら、〈touriste〉はなぜ軽蔑されてきたのだろうか。

本稿ではフランス十九世紀中葉までの文献、特に旅行記に現れる〈voyageur〉と〈touriste〉の語を拾い上げ、〈touriste〉の語に付与された意味を検討する。1830年代後半から1840年前半にかけての時期はヨーロッパにおける近代ツーリズムの勃興期とされるが、この時期の〈touriste〉の指示対象を丹念に追うことで、当時変わりつつある旅のしかたを概観することができるだろう。

## 2. 1816年から1837年まで

『ある旅行者の手記』の作者スタンダールは、ルイ・シモン著『1810年から1811年にかけての英国旅行』（1816）を読んでいた<sup>6</sup>。実はこの旅行記にフランス初の〈touriste〉の使用例が見られるのである。この旅行記のスコットランドの記述において、イタリック体で二カ所〈touriste〉の語が使われているが、目次で「〈touriste〉とはイギリス人旅行者」とであると断っている。

1827年に『英国評論』誌に掲載された、『ニューマンスリーマガジン』の記事「イギリスの回想」の仏訳でも〈touriste (s)〉はイギリス人旅行者という意味で使われている<sup>7</sup>。これらの例に共通するのは、英語の〈tourist〉をそのままの文脈で、「イギリス国内を旅するイギリス人」として使用したことである。1820年から30年代にかけて、フランスのジャーナリズムで〈touriste〉の語が散見されるようになる。1829年になると、『英国評論』誌の「イギリスの回想」仏訳で〈touriste〉はイタリアでのイギリス人旅行者を指し、「真面目な旅行者」と対比されるようになる。

真面目な旅行者 (voyageur) は歴史的建造物を研究するように、観察する。つまりローマで行う考古学の授業を受けているのである。浮ついた旅行者 (touriste) について言えば、彼らは退屈しにぎに幹線道路を行き来し、まるで小動物が太陽の光を浴びてぐるぐる走り回るようだ。彼らは無視されているが、実際、無知で、気取り屋で、滑稽で、何も見ず、誰にも顧みられない<sup>8</sup>。

つまり〈voyageur〉は歴史的建造物を研究対象として見る旅行者、〈touriste〉は退屈をまぎらわす旅行者として描写される。翻訳語は往々にして言語に新風を巻き起こすが、〈touriste〉もその例に漏れず、1820年代から版を重ねたバイロンの仏訳でも〈touriste〉の語を目にしたフランス人が今度は自ら新語を使用するようになる<sup>9</sup>。十九世紀前半にはイギリス人の姿がヨーロッパ大陸にも見られるようになり、イギリス人旅行者の数に比例してフランス語文献にも〈touriste〉が頻出する。例として、1830年のヴィクトール・ジャックモン『1828年から1832年にかけてのインド旅行』<sup>10</sup>、1832年のA. H. ルモニエ『イタリア回想』<sup>11</sup>、同年、作者不詳の『1832年と1833年の旅行の思い出』<sup>12</sup>には〈touriste〉の語が使用される。1833年、バルザックは書簡に、「クリミア半島は人びとに知られておらず、〈touristes〉はまったく訪れないし、スイス、イタリアよりもはるかに美しいらしい」と書いている<sup>13</sup>。また、〈touriste〉は1834年刊行のモルトマール＝ボワス男爵の『ツーリスト 歴史、旅行と私的情景』<sup>14</sup>の題名にもなっている。いずれの作品でも、〈touriste〉はイギリスではなく、外国を旅するイギリス人を指す。

1835年にはアレクサンドル・マルタンの『ピトレスクなスイスとその周辺』<sup>15</sup>で、第三十八章から第四十章まで〈touriste〉の章題を冠している。1836年の例では、書評で相手を攻撃するために、比喩的かつ侮蔑的に〈touriste〉を用いたり<sup>16</sup>、〈touriste〉のイタリアやオリエントへの嗜好を暗示したりする<sup>17</sup>。文学者では、辛辣な筆致で〈touriste〉を描写したのは、後に『ある旅行者の手記』執筆時にスタンダールによって参照され、引用されることになる『西仏旅行ノート』<sup>18</sup>におけるプロスペール・メリメと、バルザック主幹の『パリ年代記』誌に「ベルギー・オランダ回遊」<sup>19</sup>を発表したテオフィル・ゴーチエである。

1837年ではジョゼフ・メリエの『イタリア生活情景』に、「旅行者なら誰でもサン・ピエトロ寺院を描写する。ただし寺院を見たことのない者には正確なイメージを与えられない。描写とはそういうものなのだ。サン・ピエトロ寺院についてはジョバンニ＝バオロ・パニーニの美しい絵画の方が、詩人の詩句、旅行者 (touriste) の散文や巡礼者の報告よりも多くを言い得ている<sup>20</sup>」という文章がある。実際の風景に対する絵画作品の優位という問題は、イギリスの旅文化の本質に関わる。キャンパス上の古代ローマを重ねた風景を「絵を通して」眺めるといふ感覚がイギリスで生まれ、「絵を見るような」感覚を喚起す

るピクチャレスクな美という概念が広がったのだった<sup>21</sup>。

### 3. テオドール・オンベール「ツーリスト」

1830年代後半になって、〈touriste〉の使用例が多くなるにつれ、イギリス人旅行者の特徴について紋切り型が定着する。1837年、ルーアン出身の科学アカデミー会員のテオドール・オンベールが「ルーアン・ノルマンディ評論」誌に寄稿した「ツーリスト」(*Les Touristes*)と題する記事<sup>22</sup>からそれがよく読み取れる。記事では常に〈Touriste〉を大文字の頭文字で記し、「十年来戯画の対象になっている」イギリス人旅行者を手厳しく扱う。記事の内容は、イギリス人旅行者の行動様式、記事の著者がイギリス人旅行者と交わした会話、彼らの旅の目的、フランス人旅行者との相違点、本国での旅の受容、グランド・ツアーから職業的巡歴に至るまでの旅の歴史的背景、旅行者の分類にわたる。

記事の冒頭で「ノルマンディ人にイギリス人旅行者の話をするのは、彼らが（フランスで）初めて姿を現したのがこのノルマンディの地である」からだと説明されように、実際カレー、ブローニュなどのノルマンディの都市には年間一万人のイギリス人旅行者が上陸していた<sup>23</sup>。さらに記事は、ワーテルローの戦いでナポレオン軍の敗戦、その後の大陸封鎖解除とイギリス人によるフランス旅行の増加という英仏の歴史的背景に言及している。

[イギリス人は]ライオンを見るように我々フランス人を眺め、我々がとって食わないとわかると、段々フランスの食べ物にも慣れ、ガチョウと鴨の血でもってワーテルローで流された同国人の復讐を成し遂げた<sup>24</sup>。

また、記事にはギリシャ独立戦争時、アテネの虐殺に居合わせたイギリス人との会話が収録されている。記事の筆者によると、このイギリス人は、現地で花火や芝居でも鑑賞するように、老若男女が殺戮される様子を眺め、帰国後にイギリスのサロンで殺戮の様子を物語ると、たちまち〈fashionable〉と評価される。〈fashionable〉な人間というのは、上流階級に属し、流行に敏感な紳士であり、旅で何を見たか、どこへ行ったかを高言する旅行者である。

さらに記事の筆者によると、イギリス人とフランス人の違いは、フランス人は仕事と保養と楽しみのために旅に出るのに対し、イギリス人は仕事が順調でない場合に旅をし、保養のため、あるいは教育や楽しみのために旅をするわけではないということだ。また、イギリス人が旅に出る理由は、帰国後に旅の見聞を報告するためだという。それも、旅行案内書に紹介されている場所に行き、「現地に行った」事実を報告するだけで、イギリスでもてはやされるという。旅行先での見どころは旅行案内書によってあらかじめ提示され、

その場所を確認するのが彼らの旅行の流儀なのである。現代でも、名所はガイドブックによって規定されていて、ツーリストはこれをなぞるだけで満足し、ガイドブックの記述内容が正確かどうか確認することが旅の目的になってはいないだろうか。

#### 4. スタンダール『ある旅行者の手記』(1838)

以上のように、フランス語文献では〈touriste〉はイギリス人旅行者を指すか、あるいはイギリス人に比して侮蔑的に使われていた。それに対してスタンダールはフランスの「鉄商人」である旅行者を設定し、その旅行記のタイトルにおいて、主人公が〈touriste〉であることを明示した。こうしてスタンダールはそれ以前に考えられていた〈touriste〉の属性(有閑・イギリス人)から離れて、新しい旅行者の類型を作り上げることに成功している。ただ、この前例のない「旅行者」と旅行記の内容に対しては賛否両論だった<sup>26</sup>。

『ある旅行者の手記』は、「鉄商人」である旅行者が商用でフランスの地方をまわり、仕事の合間に旅日記をつけるという体裁で書かれている。スタンダールにおける語り手によると、アーサー・ヤングのようなイギリス人はフランスについての旅行記を記しているが、フランスにはフランス旅行記が存在しないので、自分が旅をして、自国のことを同胞に知らしめることを本書の目的とした<sup>26</sup>。つまり、〈touriste〉の本来の意味、すなわち自国を歩き回る旅行者という意味がイギリス人からフランス人に転用されたことになる。ところが、『ある旅行者の手記』で、〈touriste〉の語はタイトル以外にはニカ所しか使われず、さらに、その指示対象は、題名で〈touriste〉と名指されていた語り手ではない。編集者のすすめによって、スタンダールが〈touriste〉の語をタイトルに入れた可能性も考えられ、スタンダールが〈touriste〉という語にどの程度、意味を込めていたのかどうかは不明である。だが、当時の文壇を念頭に置くと、スタンダールは反=ロマン派旅行記を表明していると考えられる。

ではロマン派の旅行記はどのように成立したのだろうか。十九世紀初頭にシャトーブリアン著『パリからエルサレムまでの旅程』が旅行記の規範になり、さらにラマルチーヌはオリエント旅行記で、ロマン派の記念碑を打ち立てた。フランスではそれまで旅行記は文学者の手によるものとは見なされていなかったが、ロマン派時代を通して、シャトーブリアンの歴史家、自伝作家の要素と、ラマルチーヌの詩人、哲学者の要素が備わっていれば、旅行記作家たりうるとされた。本論の冒頭に挙げたジョルジュ・サンド著『ある旅人の手紙』がこの文学的伝統を受け継いでいると考えられており、サンドの旅人〈voyageur〉は叙情詩的独白によって、ロマン派作家の体現者と見なされていた<sup>27</sup>。例として、サンド作品の書評には、「『ある旅人の手紙』には幻想とエゴチズムがつまっている。作者が意図しない燃え上がる詩心に溢れている。『ある旅人の手紙』には無視できない利点がある。

これは『インディアナ』の作家による私的な回想と告白のようなものである<sup>28</sup>と批評された。この書評に見られる「エゴチスム」の語も英語からの翻訳語であり、王政復古時代に多く用いられ、スタンダールの自伝的作品『エゴチスムの回想』（1832）のタイトルに使われている。否定的にとらえると自己中心主義、肯定的にとらえると作者の自己への執着、己の個性の崇拜を意味するが、『ある旅行者の手記』の冒頭では、「自分のことを私と称するのは、エゴチスム（自我中心主義）によるのではない。手っ取り早く語る方法が他にないせいである<sup>29</sup>」と述べて、自分が「私」という一人称を用いる理由を説明している。つまりスタンダールは、ロマン派が用いてきた〈voyageur〉に対して、ロマン主義的自己顕示欲を回避するために、〈touriste〉を持ち出したのである。サンドの『ある旅人の手紙』で「無用で鼻持ちならないツーリストという職業<sup>30</sup>」といわれていることを逆手にとったのだ。スタンダールが、旅のために旅する旅行者ではなく、出張中の卸売業者を〈touriste〉と名指したことは、十九世紀末の辞書の定義を考慮すると逆説的といえよう。

「決まった場所に行くツーリスト」というリトレ辞書の定義からも外れて、スタンダールの主人公は、旅の旅程にも新風を吹き込んでいる。「フランス旅行記は存在しない<sup>31</sup>」わけではなく、グランド・ツアーの旅程に組み込まれている町や地方を外れるような行程の旅行記がないのである。スタンダールの主人公は突然引き返したり、方向転換をしたりして読者に予想のつかない旅程をとるので、このツーリストは気まぐれ、あるいは非現実的だと批判された。スタンダールの〈touriste〉は典型には程遠く、型破りであるがゆえに読者に強いインパクトを与え、〈touriste〉をフランス人旅行者の意味でも使えることを示した。

## 5. デジレ・ニザール『旅の思い出』

こうして1838年以降、〈touriste〉はイギリス人旅行者とフランス人旅行者、あるいは他国からの旅行者の意味で用いられ、次第にフランス語に定着していくのである。1838年にはオベール・ド・ランソラ著『イタリアの思い出』<sup>32</sup>、M. ヴァレリー著『コルシカ島、エルバ島、サルディニア島への旅行記』<sup>33</sup>に〈touriste〉の語が確認できる。〈voyageur〉の一類型であったはずの〈touriste〉が二語が並列して使われる文章を読んでみよう。

1833年から1834年にかけてのフランス旅行記である『旅の思い出』（1838）で著者のデジレ・ニザールは、〈touriste〉の語をイタリック体で強調し、多用している。筆者曰く、ピレネーは描写するに値するとは思われていないため、滝は手つかずのままである。「旅行案内書をもった旅行者（voyageur）とツーリスト（touriste）は、あらかじめ出発前に滝を賞嘆する文章を書き綴っていたのだから、彼らには冒険のように思われるだろうが、

感じたことを述べさせていただきたい。旅行案内書を持った旅行者 (voyageur) とツーリスト (touriste) は、宿で、目的地に出発する前に旅の印象を書いてしまう。本の記述や、同類の旅行者 (touriste) の伝聞によって、山、滝、湖についてどのように考え、描写すればいいのか了解済みだからである。すでにそれらの書き方の型ができあがっている。彼は、どこで恐怖、驚嘆、憂愁を表現したらいいのかもわかっている、旅行鞆の中に仕舞っている。山に到着すると、旅行案内書を取り出して、「まさにそうだ!」、滝に到着すると、「マレーの旅行案内書が説明している通りだ」というだろう。しかし、すでに知っていることを確かめに行くのにたいそう骨を折って、何になるというのだろうか<sup>34</sup>。この記事で〈voyageur〉も〈touriste〉もイギリス人旅行者のことなのだが、明確な差異があるわけではない。〈voyageur〉も〈touriste〉も旅行案内書を持っているのだから、内実は変わらず、単純な言い換えである。〈touriste〉と呼ばれる特殊なカテゴリーがあるのではなく、旅行者 (voyageur) であれば、同じ行動をとるということを物語っている。

実際、マレーの旅行案内書はイギリスで評価が高かった。具体的かつ実用的な情報を伝達することで旅を指南する旅行案内書が旅行者を増やしたともいえるだろう<sup>35</sup>。同時期にドイツではベデカー、フランスではジョアンヌの旅行案内書 (ガイドブック) が刊行され、アルプスやイタリアの都市がガイドブックの記述対象になる。ニザールは、ガイドブックを偏重する旅行者は旅先で何も見ないと揶揄しているのである。

ヴズーからリュクスイユまでのニザールの報告を読もう。「目を見張るようなもの、記憶に残るようなもの、旅行者 (touriste) に記録させるものは何もない。幸いだ。手帳にくだらないメモを書き付ける価値などない場所では、旅行者 (touriste) はパンとワインをいただいでいればいいのだから。(…)この場所では、人間は貧しく生活し、まずいパンしか食べない。旅行者 (touriste) とは違って (…)  
旅行者 (touriste) が軽蔑する (人間の生活) 風景を私は重視する<sup>36</sup>」。ここでも〈touriste〉はイギリス人旅行者を指し、人間には興味がないという旅行者の紋切り型を描いている。これは現代でも表面的な観光として指摘されることだろう。トドロフはシャトープリアンを最初の〈touriste〉とし、その理由として、シャトープリアンは人間を見るのではなく、風景や死んでいるもの (古代に文明を誇っていたギリシャ人や遺跡) を見に来たことを挙げている<sup>37</sup>。

## 6. 旅行者のカリカチュア

1838年から40年代にかけての〈touriste〉の語の使用は、フランス人旅行者の数に比例して、増えていく。この新しい社会現象を戯画で皮肉った『旅行者の生理学』は、当時流行していた「生理学」シリーズ内の一巻として1841年に出版された。「旅行者 (touriste)」と題された章には、旅行者の戯画とともに類型に注釈が加えられており、「芸術家である



旅行者」、「大学関係の旅行者」、「おしゃべりな旅行者」、「ユーモアに富む旅行者」、「遊び人である旅行者」、「泣き虫の旅行者」、「狩りが好きな旅行者」、「論争好きな旅行者」、「人道主義的旅行者」、「物乞い旅行者」、「義務で旅する人<sup>38</sup>」が挙げられている。例えば、「芸術家である旅行者」は、五月にヨーロッパの見晴らしのよいすべての場所でスケッチをする必要があると感じる。ある場所を出発し、またある場所で立ち止まり、「来年スケッチしに戻ってこなければ」と呟く。

旅行者が増えると、彼らの営為はひとつの現象あるいは習慣になり、それを言い表す言葉が生まれる。1841年フランス語で〈tourisme〉の語が初出し、旅に立たなくてはならない「感染症」であると皮肉られた（「地上の幸福者は上流社会では避けがたい〈ツーリズム〉という感染症に罹ったように感じる。この旅行は健康のために行うものではなく、自尊心にかかわることであり、何が何でも片付けておきたい仕事なのだ」<sup>39</sup>）。ここではイタリアを訪れる〈touriste〉はイギリス人である。ギシャルデの記事が掲載された同じ『フランス人の自画像』シリーズに所収の「スイスのイギリス人」もまたイギリス人を記述対象とした風俗観察文である<sup>40</sup>。

だが、同年『フランス人の自画像』シリーズの《Le Touriste》と題する一章では、実際はフランスの〈touriste〉より、イギリスの〈touriste〉の数が多いのだが、本記事ではフランス人旅行者を扱うと説明されている<sup>41</sup>。旅行者は、「金持ちの旅行者」、「貧乏な旅行者」、「政治活動をする旅行者」、「賭け事の好きな旅行者」、「文学的旅行者」、「何も見なかった旅行者」に分類されている。ここで現代のバックパッカーの原型である「貧乏な旅行者」が登場することに着目しよう。

## 7. 徒歩旅行

「貧乏な旅行者」は当然のごとく「歩く」。『フランス人の自画像』所収の「遊歩者」《Le flâneur》で、〈touriste〉とは歩く人であると定義される<sup>42</sup>。

1875年に刊行された『十九世紀ラルース辞典』には、「十八世紀にはジャン＝ジャック・ルソーがスイスとイタリアへの長期の徒歩旅行によって〈touriste〉の最初の例を示す<sup>43</sup>」と記されている。〈touriste〉の語が存在する前に、ルソーが〈touriste〉の先駆的存在として位置づけられているのだが、有目的の旅が主流だった時代に、無目的の旅の豊かさを示したのは確かにルソーだった。馬車での移動が一般的であるのに、ルソーはあえて徒歩旅行を行った。それはルソーにとって自然の雄大さを嘆賞して感性を磨き、精神を豊かにし、生を謳歌することに他ならなかった。ルソーは『新エロイズ』（1861）で、登山のすがすがしい経験に加えて、アルプスの風景美と結びついた徒歩の楽しみに文学的表現を与えた。『新エロイズ』の英訳が同年に刊行されると、この新しい感性は国境を越え、熱

狂的読者をアルプスに向かわせ、イギリス・ロマン派の旅と詩作にも影響を及ぼした。『エミール』（1862）では、本で読むだけではなく、実際に旅に出てみなければならないと説く。『孤独な散歩者の夢想』（1778）では目を楽しませる風景の魅惑について述べた上で、自我が風景の中に溶け込み、精神を涵養するのだと説いた。

1780年代のイギリスでは、徒歩旅行を行う人間は野蛮人扱いされ、危険人物と見なされていたのだし、徒歩で移動するのは、放浪者や乞食ぐらいのもので、明らかに下層階層の中でも最下位の身分を表していた。このような状況で、ルソーは徒歩旅行の豊かさを賞嘆し、旅の意識を著しく変化させたのだった。十八世紀末、イギリス人はフランス革命により大陸への旅行を断念せねばならなくなり、自国の風景を歩いて訪ねた。ナポレオンによる大陸閉鎖の後には、大陸旅行はイギリス一般民衆の間にも広まった。行き先はフランス、スイス、イタリアが定番で、特にルソーによる山岳風景の発見と、それに続く人間の感性の変化により、アルプスを徒歩で巡る旅が流行した。

『十九世紀ラールス』の記述に戻ると、ルソーが〈touriste〉の例を示す理由は、有目的ではなく無目的で旅を行うという点、つまり純粹な楽しみのために旅をするという発想が新しいからである。一方で、イギリスでも、1780年前後にピクチャレスクな風景と結びついて、旅のために旅をする旅行者が現れる。ワーズワースは大陸での徒歩旅行を企て、歩く行為を創作の必要条件とみなした。ロマン派の作家たちが徒歩旅行の実践者であることは、歩くことと思索を連動させ、新しい精神を形作っていることの証左になっている。

## 8. ロドルフ・テプフェル『ジグザグ旅行』（1844）

「乗り合い馬車と川舟の時代には、〈touriste〉はほとんど存在しなかった」と『十九世紀ラールス』で述べられるように、観光旅行の始まりは、交通機関の発展と結びつけられる。1830年代にイギリスで敷設された鉄道は、フランスでも1842年の「鉄道憲章」の影響で発展しつつあり、スイスでも短距離ながら運行されていて、やがて高所への移動手段として登山鉄道に頼ることになる。そうはいつても1840年の時点では、平地での一般的な移動手段は馬車だった。

1842年にジュネーヴの教育者テプフェルはあえて徒歩旅行の意義を主張し、教育的効果を信じ、生徒を率いて徒歩旅行を実践している<sup>44</sup>。原始的である徒歩旅行を見直す背景には、肉体への回帰という目的がある。『アルプス徒歩旅行』には、寒暖、気候、空腹、汗、のどの渇き、恐怖など人間の肉体的反応が、具体的な体験に則して描写されている。精神以前に肉体である人間の状態を考察した上で、歩行と思索の関係に言及する。スイス人とイギリス人の挙動の違いについても述べている。いうまでもなく、アルプス登山の行われるスイスはヨーロッパ随一の「観光地」であり、同時に訪れる旅行者の人間観察の場であっ

なのだ。フランス語で初めて〈touristique〉（観光に関する）の語を使ったのがスイス人ロドルフ・テプフェルだったことにも納得がいく。

## 9. ネルヴァルの事例

スタンダール『ある旅行者の手記』刊行直後の1838年に戻ると、ネルヴァルは9月18日付の『メサジェ』誌発表記事で、「文学的旅行者」〈touriste littéraire〉に対して、独特の徒歩旅行の詩学を打ち出した。

私がどのように旅をするのかご存じでしょうが、私は「文学的な旅行者」の習慣も資質も持ち合わせていません。私はすでにモナリザと同じくらい多くの国を駆け回りましたし、フランスのあらゆる城門を出入りしてきました。しかし、旅行案内書の順番に従って名所旧跡を訪ねるということに関しては、注意深く避けてきたことです。私は歴史的建造物や芸術作品に注意を払うことはめったにありませんし、街に入ったら、偶然に身を任せ、散策者として目になうものが見つかるでしょう。この無頓着のせいで見逃したものもありますが、おかげで公式の旅行案内書には紹介されていないような、あるいは案内書を頼っていたらむしろ損なわれてしまっているだろう出会いや思いがけない感動を存分に味わうことができました。私が旅において好きなことは、森や平野の空気を胸に吸い込むこと、永延と続くフランドルの霧深い草原を迅速に走りぬけること、あるいは太陽の光で黄金色に輝くイタリアの明媚な田園をゆったりと歩くことなのです。そしてまた、町々の曲がりくねった通りを偶然まかせに歩き回ること、異国の言葉を響かせている色とりどりの群衆の中に、身分を知られることなく紛れ込み、彼らの永遠の生命に一日限り、加わることなのです。慣習のゆるやかな束縛から逃れることのできる人間にとって、これは興味深い試練、心身の健康によい孤立ではないでしょうか。険しい登り道の後、振り返って、唯一の崇高な地点から己の人生を眺めるのです。それはちょうどストラスプールの鐘楼の高見から、自分が一日かけて苦勞し進んできた道を振り返って眺めるようなことなのです<sup>45</sup>。

ネルヴァルの旅行者は自由気ままな旅を満喫しており、当時考えられていた「文学的旅行者」とは明らかに正反対の行動をとっている。「フランス人の自画像」所収《Le Touriste》の記事に一類型として挙げられている「文学的旅行者」〈touriste littéraire〉は、ロンドンまたはパリの雑誌社に旅行の報告を書き送るレポーターであり、土地の名士による歓待を期待し、文学的名声を望むのである。「文学的旅行者」の滞在は地方にとって大事件であり、地方紙は彼の近況を細かに伝える。この「文学的旅行者」は、ネルヴァルが

旅先で落ち合うことになっていたアレクサンドル・デュマを彷彿させる<sup>46</sup>。デュマとは異なりネルヴァルは無名であったことを考慮に入れなければならないが、この通俗的な「文学的旅行者」の旅のしかたとは対照的に、身分を知られることなく現地の人びとの生活に入っていくネルヴァルの独自性が際立っている。

## 10. オリент旅行

これまで〈touriste〉がヨーロッパにおける旅行者を指示する例を提示したが、ここで十九世紀に新しい社会現象となったオリент旅行の一例を見よう<sup>47</sup>。

1840年から1850年に発表した新聞・雑誌記事をまとめて1851年に刊行したネルヴァル著『東方紀行』における〈voyageur (s)〉の使用頻度の55回のうち、8回が語り手＝主人公を指している。それ以外は、旅行者一般を指す場合と、〈de voyageur〉となって形容詞的に使用される場合かのいずれである。十九世紀フランス語で「旅行者」の意味で使われる〈voyageur〉はフランス語の普通名詞であるため、当然、使用頻度が高い。一方で、『東方紀行』において〈touristes (s)〉の使用頻度は、以下に示す通り11回である。

1. 十一月にパリを出発したツーリスト (un touriste parti de Paris en plein novembre, p. 173<sup>48</sup>)
2. イギリス人ツーリスト (les touristes anglais, p. 189)
3. このような大胆なツーリスト (ces touristes hardis, p. 193)
4. イギリス人ツーリスト (les touristes anglais, p. 258)
5. イギリスからのツーリスト (les touristes d'Angleterre, p. 277)
6. ポンペイウス記念碑の柱頭で行われている食事のように、ケオプスのピラミッドの上での食事は、実際ツーリストの通過儀礼である。(le repas sur la Pyramide de Chéops est, en effet, forcé pour les touristes, comme celui qui se fait d'ordinaire sur le chapiteau de la colonne de Pompéi à Alexandrie, p.387)
7. 今回はツーリストの会話をするにとどめた。彼はすでに牢獄で、何人もの英国人に会っていたのだし、彼の人種や彼個人についても質問されていたのだ。(Je me bornai donc pour cette fois à une conversation de touriste. Il avait déjà vu, dans sa prison, plusieurs Anglais, et était fait aux interrogations sur sa race et sur lui-même, p. 519)
8. 話の弾まないツーリスト (quelques touristes taciturnes, p. 571)
9. 自分がパシャからただのツーリストのように扱われたことに不満を言った。(Je me plaignis au pacha d'être traité par lui en touriste vulgaire, p. 586)

10. 普通のツーリスト (un touriste ordinaire, p. 783)

11. 普通のツーリストは社会の秘密に迫るために長期滞在をしない。社会は彼らの表面的な観察から慎重に隠されているのである。(les touristes ordinaires ne séjournent pas assez longtemps pour pénétrer les secrets d'une société dont les mœurs se dérobent si soigneusement à l'observation superficielle, p. 838)

使用例7 (conversation de touriste) では、いつ現地に到着したか、旅行で何を見たか、どこに滞在しているかなどの「旅に関するたわいない話」の意味で使われている。それ以外の使用例に共通するのは、〈touriste〉に形容詞ないしは修飾句が付くことである。この場合、〈touriste〉は「イギリス人ツーリスト」(使用例2、4、5)、「ただのツーリスト」(使用例9)、「普通のツーリスト」(使用例10、11)、旅行の紋切り型をなぞるツーリスト(使用例6)である。使用例11において「普通のツーリスト」は短い滞在期間に、表面的にしか社会を観察しないと定義されていることがわかる<sup>49</sup>。また、使用例3は「大胆なツーリスト」は異質である。その前後を読んでみよう。

まだ蒸気船も、鉄道もなく、石を敷いた道も、ただの道さえもなく、人びとがほとんど旅行しなかった時代には、ダヌシー、ルベイ、シラノ・ド・ベルジュラックといった文学者たちがいて、いわゆる空想旅行記というものはやらせた、これらの大胆な旅行者たち (touristes) は、月や太陽や惑星を描写したが、それはもちろんルキアノス、メルリヌス・コッカウス、ラプレーの流れを汲む作り話だ<sup>50</sup>。

これら十七世紀の空想旅行記作家は奇想天外な旅行を描いた作家で、彼らの登場人物と同一視されている。空想旅行記をやらせた〈touriste〉と呼ばれているのは、この時代に流行した〈touriste〉の現象に掛けているものと思われる。

さて、使用例1では、語り手自ら〈touriste〉と規定している。ネルヴァルの旅行者は文字通り〈touriste〉なのだろうか。ここでネルヴァルが自らの語り手=主人公に「ツーリスト」と言わしめた理由を考えよう。「真冬にパリを出発した旅行者 (touriste) の遍歴に興味を持ってもらえるかどうかかわかりません」という一文で始まる当該記事の初出は1840年1月28日号の「プレス」紙である。1846年3月1日付『アルチスト』誌と、1849年1月7日付『シルエット』誌掲載を経て、1851年単行本『東方紀行』に収録される<sup>51</sup>。観光シーズンから外れた真冬にわざわざ旅に出るような旅行者ではあるが、多くのツーリストが目指すスイスに向かうのはやはり「ツーリスト」なのである。しかし、『東方紀行』では、実際、主人公は英国人旅行者の宿泊するホテルには泊まらないし、鉄道のまっすぐの線を嫌い、い

くつかの例外を除き、時間にも縛られずに、気ままな旅を楽しむ。主人公はガイドブックの記述をほとんど無視し、何かにつけて、人とは違った旅行を好むのである。

1840年の旅行記事では、タイトルに「ジュネーヴより、1月15日」とだけ記されており、ネルヴァルが実際に行った1839年10月から1840年3月までのスイス、オーストリア、ドイツへの旅行の報告をしている。すなわち初出では、〈touriste〉は「よく知られている」スイスへの旅行者というニュアンスで自己定義しているだけで、オリエントへの旅行者を想定していない。奇妙なことに、『プレス』紙の旅行記事でも、後に「ジュネーヴより、1月15日」が組み入れられる『東方紀行』でも、この文は踏襲されるものの、その後、旅行記の語り手＝主人公が自らを〈touriste〉と呼ぶことはない。ネルヴァルはヨーロッパ旅行において主人公に〈touriste〉を自称させたものの、次元の異なるオリエントを旅行中の主人公には〈touriste〉を任じてはいない。『東方紀行』で描かれる主人公は、ヨーロッパの町を徒歩で歩き回る旅人の延長にあると同時に、別の次元に足を踏み入れる多層的な存在でもある。シテール島で女神やキリスト教信仰の秘儀を知ろうとし、エジプトではピラミッドの内部でイシス信仰を呼び起こし、レバノンではドルーズ教の娘と結婚して、門外不出の教義を修得したいと願う。ネルヴァル作品の主人公はオリエントの街を散策すると同時に、オリエント社会の深淵に降りていくのであり、水平と垂直の両軸の上を行き来するのである。このような主人公を〈touriste〉と呼ぶことに違和感がありはしないか。異文化に真正面から対峙し、現地での永住を望むために祖国を捨てる覚悟の旅行者は〈touriste〉ではない。〈touriste〉は旅によってアイデンティティを脅かされる危険には陥らないのである。実は〈touriste〉の定義づけは異文化の受容と自己形成に関わる問題提起を促す。オリエントにおける〈touriste〉像の問題は性格の異なる議論になることから、紙幅の関係上、別稿に譲りたい。

## 11. おわりに

〈touriste〉像の変遷を総括すると、英語からの借用だった〈touriste〉は、フランス語への導入時にはイギリス国内を旅するイギリス人旅行者を、やがてフランス、スイス、イタリアを旅するイギリス人を指すようになった。彼らは歩くことこそ旅だと信じ、旅行案内書を盲信し、型にはまった見方や行動しかできず、現実の風景や旅で出会う人間を見ないとされた。こうして旅を自らの勲章とするだけで、狭い見方しかできないイギリス人ツーリスト像が形成された。イギリスでも〈tourist〉は軽蔑の対象だが、フランスではさらに「<sup>アン</sup>イギリス人<sup>嫌</sup>い」が〈touriste〉に重ねられた。数の上で勝るイギリス人旅行者から、フランス人へと語の指示対象が広がるきっかけを作ったのはスタンダールだったが、その後フランス人ツーリストは戯画の対象になる。以上、見たように1840年代までは、〈touriste〉

は特定のニュアンスを伴って使われていた。

『十九世紀ラルース辞典』でも引き合いに出されるイポリット・テーヌ『ピレネー旅行』（1858）で、旅行者が六通りに類型化される場合のみ〈touriste〉と呼ばれていることから<sup>52</sup>、1850年以降も〈touriste〉が風刺の対象として扱われていることは明らかである。また、フランス・ロマン派の作家たちも、フランス人〈touriste〉について、「ツーリストは遠くにあり、有名なものしか信じない」（ジョルジュ・サンド）、「不躰なツーリストは旅の奥義を決して明らかにできない」（ジュール・サンド）と述べつつ、実存的な体験とはほど遠い旅行を行う者を〈touriste〉と呼んだ。1860年頃には鉄道の発展とともに旅が身近になり、レジャーが人びとの生活に組み込まれていくと、次第に旅行者のコノテーションも変化していく<sup>53</sup>。〈touriste〉の語が多用されるようになると〈voyageur〉との境界が曖昧になり、現代における観光の認識へとつながっていくだろう。

「旅行者」が〈voyageur〉から〈touriste〉へ移行する過程はエリク・コーエンの観光経験の類型化に対応するだろう<sup>54</sup>。すなわち、ツーリスト自身の価値観、生き方の核心部分に大きくふれる経験を行うのが〈voyageur〉なら、気分転換して楽しめればいいという旅行者、あるいは表面的なレベルにとどまる旅行者は〈touriste〉だといえる。旅行記の作者は往々にして〈voyageur〉だと自任しており、他人に対しては〈touriste〉の判決を下すのである。ロマン主義時代の旅行記作家は、ものの見方や感じ方の独自性を前面に押し出すために、人と同じであることを避ける、つまりツーリストとは一線を画す傾向にある。行動を見れば〈touriste〉の資質は十分あるのだろうが、旅行記作家は見る主体であり、旅行先での見聞すべき土地の様子、そして否が応でも目に入る〈touristes〉を観察し、描写する。旅行記作家はフランス語で〈écrivain voyageur〉と呼ばれるように、〈touriste〉ではなく〈voyageur〉たらしとする。

本稿では旅行記の主人公が〈touriste〉とされている例も確認した。スタンダールは『ある旅行者の手記』で、語り手を〈touriste〉に設定したが、作中で自らを〈touriste〉と呼ぶことはない。同じくネルヴァルの『東方紀行』の語り手も、旅行記の冒頭で自らを〈touriste〉と定義したにも関わらず、その後、ただの〈touriste〉として扱われたことに不平を言う。彼らの一方は奇想天外なルートを取る鉄商人であり、もう一方は観光シーズンを外して出発する変人だった。二つの例から導けることは、スタンダールとネルヴァルのような旅行記作家は、自らの姿を見つめる目を持ち合わせていて、自らを相対化することができるということだ。彼らは旅行者だという理由で〈touriste〉を語りながらも、実際描かれる言動は反＝ツーリスト的なのだが、これは一般に考えられている〈touriste〉と、例外である自己との差異を、読者に気づかせるための、作家の創意ではないだろうか。差異からアイロニーを生み出す試みだとも言えよう。つまり作家がある一つの平凡な言葉を

自らの詩学に組み込む文学創造の所作なのである。

- 
- 1 Jean-Dider Ulbain, *L'Idiot du voyage, Histoire de touristes*, Paris, Payot, 2004, p. 40. 1792年刊行の John Byng の旅行記が初出である。
  - 2 マルク・ボワイエ『観光のラビリンス』法政大学出版局、2006年、36頁参照。
  - 3 Jean-Dider Ulbain, *Ibid.*, p.46.
  - 4 Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX<sup>e</sup> siècle*, t. 15, article 〈touriste〉, pp. 360–361, 1875.
  - 5 Jean-Dider Ulbain, *L'Idiot du voyage, Histoire de touristes*, Paris, Payot, 2004, p. 38.
  - 6 V. Del Litto, 〈Sur le mot touriste〉, *Stendhal Club*, 4<sup>e</sup> année, No. 13, 1961, p. 61. V. Del Litto, 〈Introduction〉 dans *Voyages en France*, textes établis, présentés et annotés par V. Del Litto, coll. Pléiade, Gallimard, 1992, pp. XXXVI–XXXVII.
  - 7 〈Souvenirs d'Italie, n<sup>o</sup>. IV〉, *La Revue britannique*, t. XIV, 1827, p. 269.
  - 8 〈Souvenirs d'Italie, n<sup>o</sup>. XIII〉, *La Revue britannique*, t. XXVII, 1829, pp. 71–72.
  - 9 V. Del Litto, 〈Introduction〉 dans *Voyages en France*, textes établis, présentés et annotés par V. Del Litto, coll. Pléiade, Gallimard, 1992, pp. XXXVI–XXXVII.
  - 10 Victor Jaquemont, *Voyage dans l'Inde pendant les années 1828 à 1832*, Firmin-Didot, 1834.
  - 11 A. H. Lemonnier, *Souvenirs d'Italie*, M<sup>me</sup> de Bréville-Levasseur, 1832.
  - 12 Anonyme, *Souvenirs de Voyage en 1832 et 1833*, (À ma bien-aimée Lateta), Bailly, 1834.
  - 13 Honoré de Balzac, *Correspondance*, t. 2, juin 1832–1835, année 1833.
  - 14 Le baron de Mortemart-Boisse, *Le Touriste. Histoire, voyages et scènes intimes*, Vimont, 1834.
  - 15 Alexandre Martin, *Tableau général, descriptif, historique et statistique des 22 cartons, de la Savoie, d'une partie du Piémont et du pays de Bade*, Hippolyte Souverain, 1835.
  - 16 *Le Constitutionnel*, 28 août, 1836, compte rendu d'〈I. C. T.〉. Voir Geoff Woollen, 〈La misère de la philanthrope : Benjamin Appert à Rémelfing (1841-44)〉, *Les Cahiers lorrains*, n<sup>o</sup>. 2, 1985, pp. 145–162. (sur Benjamin Appert, *Bagnes, prisons et criminels*, Paris, Guilbert-Roux, 1836). 哲学者バンジャマン・アペールの『徒刑場、監獄、犯罪者』の書評では、旅行者は「牢獄めぐりのツーリスト」とされている。アペールはヨーロッパを旅し、とくに監獄を視察した。
  - 17 Alphonse Rastoul, *Tableau d'Avignon, Avignon*, Rastoul, 1836, p. 1.
  - 18 Prosper Mérimé, *Notes d'un voyage dans l'ouest de la France*, Fournier, 1836.
  - 19 Théophile Gautier, 〈Un Tour en Belgique et en Hollande〉, *Chronique de Paris*, du 25 septembre au 25 décembre 1836, repris dans *Zigzags*, Paris V. Magen, 1845 et dans *Caprices et zigzags*, Paris V. Lecou, 1852. ゴーチエは本作品で1836年夏に友人ネルヴァルと行った北方旅行を綴っている。
  - 20 Joseph Méry, *Scènes de la vie italienne*, Dumont, 1837, t. I, p. 270.
  - 21 中島俊郎『イギリスの風景 教養の旅から感性の旅へ』, NTT 出版、2007年、70–75頁参照。
  - 22 Théodore Homberg, 〈Les Touristes〉, *Revue de Rouen et de Normandie*, vol. 5, 1837, pp.53–64. 以下、引用はこの記事による。
  - 23 Marc Boyer, *Histoire de l'invention du tourisme. XVI<sup>e</sup>–XIX<sup>e</sup> siècles*, Paris, Édition de l'Aube, 2000, p. 191.



- 24 Théodore Homberg, *op. cit.*, p. 54.
- 25 《Notice》, dans Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, dans *Voyages en France*, coll. Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1992 (1838), p. XXXVI-XXXVII.
- 26 Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, dans *Voyages en France*, coll. Pléiade, Gallimard, 1992 (1838) .
- 27 Voir Gérard Rannaud, 《Du pittoresque à l'égotisme : une poétique de l'ironie dans le récit de voyage》, *Voyager en France au temps du romantisme. Poétique, esthétique, idéologique*. Textes réunis, présentés par Alain Guyot et Chantal Massol, Grenoble, ELLUG, 2003, pp. 215-240.
- 28 *Revue de Paris*, vol. 29, mars 1837, 《Bulletin》, p. 78. なお、George Sand, *Œuvres complètes 1836-1837*, (sous la direction de Béatrice Didier, édition critique par Catherine Mariette-Clot, Paris, Champion, 2010) で当時の書評が読める。
- 29 Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, dans *Voyages en France*, coll. Pléiade, Gallimard, 1992 (1838), p. 3.
- 30 George Sand, *Lettres d'un voyageur*, dans *Œuvres*, Nouvelle édition, Paris, Garnier frères, 1844, p. 31. なお、作品の初出は、*Revue des Deux Mondes*, du 15 mai 1834 au 29 mai 1836 ; *Œuvres de George Sand*, vol. XV et XVI, Paris, Bonnaire, 1837, 2 vol., 8-in (apparition de la préface) .
- 31 Stendhal, *Ibid.*, p. 3.
- 32 Aubert de Linsolas, *Souvenirs de l'Italie*, t. I, Avignon, L. Auranel, 1838.
- 33 M. Valléry, *Voyages en Corse, à l'île d'Elbe, et en Sardaigne*, Bourgeois-Maze, 1838.
- 34 Désiré Nisard, *Mélanges. I. Souvenirs de voyage*, Delloye et Lecou, 1838, p. 226.
- 35 Cf. John M. Mackenzie, "Empires of Travel: British Guide Book and Cultural Imperialism in the 19<sup>th</sup> and 20<sup>th</sup> Centuries", *Histories of Tourism. Representation Identity and Conflict*, edited by John K. Walton, Clevedon, Cheltenham View Publications, pp. 19-38.
- 36 Désiré Nisard, *op. cit.*, p. 234.
- 37 Tzvetan Todorov, *Nous et les autres. La réflexion française sur la diversité humaine*, Seuil, coll. Points Essais, 1989, pp. 223-225. ツヴェタン・トドロフ「われわれと他者 フランス思想における他者像」小野潮、江口修訳、法政大学出版局、2001年、404-406頁。
- 38 Maurice Alboy, *Physiologie du voyageur*, dessins par Daumier et Janet-Lange, 1842, pp. 9-17.
- 39 Francis Guichardet, 《Les Touristes en Italie》, *Prisme, Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du dix-neuvième siècle*, Paris, L. Curmer, 1841, pp.156-163. 《Ces heureux de la terre se sentent tout à coup piqués de la mouche du tourisme, contagion inévitable du monde élégant. Alors ce voyage n'est plus une nécessité hygiénique, mais une affaire d'amour-propre, une corvée dont ils veulent se débarrasser à tout prix.》(p. 165)
- 40 Roger de Beauvoir, 《Le Touriste》, p. 210 ; F. F., 《Les Anglais en Suisse》, pp. 43-47, *Prisme, Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du dix-neuvième siècle*, Paris, L. Curmer, 1841 reproduit par Hon-no-Tomosha Publishers, Tokyo, 1999, t. III.
- 41 Roger de Beauvoir, 《Le Touriste》, *Ibid.*, p. 215.
- 42 《Le Flâneur》, *Les Français peints par eux-mêmes : encyclopédie morale du dix-neuvième siècle*, Paris, L. Curmer, 1841, reproduit par Hon-no-Tomosha Publishers, Tokyo, 1999, t. III, p. 69. フラヌールは「都市の遊歩者」という十九世紀の文学的テーマであるが、ここでは旅

における遊歩に注目する。

- 43 Pierre Larousse, *op.cit.*
- 44 Rodolphe Töpffer, *Voyage autour du mont Blanc, dans la vallée d'Hérens, de Zermatt et au Grimsel* [...], Genève, Schmid, 1843.
- 45 Nerval, (À M. B\*\*\*\*\*), article du *Messageur*, 18 septembre 1838, *Œuvres complètes*, tome I, coll. Pléiade, Gallimard, 1989, p. 455.
- 46 「デュマの通り過ぎる町の新聞は、毎朝彼の近況を伝えています。」 Nerval, *Ibid.*, p. 456.
- 47 このテーマについては多くの研究書が存在するが、石井洋二郎『異郷の誘惑—旅するフランス作家たち』東京大学出版会、2009年、石川美子『旅するエクリチュール』白水社、2000年、工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説—植民地・共和国・オリエンタリズム』東京大学出版会、2003年が参考になる。
- 48 Gérard de Nerval, *Voyage en Orient, Paris*, Charpentier, 1851. 引用はプレイヤー版（ジャン・ギヨーム、クロード・ピショワ編集）による。Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, coll. Pléiade, Gallimard, 1984. 括弧内は原文と引用頁。
- 49 Nerval, (À M. B\*\*\*\*\*), article du *Messageur*, 18 septembre 1838, *Œuvres complètes*, tome I, coll. Pléiade, Gallimard, 1989, p. 455.
- 50 Nerval, *Voyage en Orient, op. cit.*, p. 193.
- 51 Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, *op. cit.*, pp. 173, 1193, 1398. 「シルエット」誌と『東方紀行』では、「真冬に」は「十一月半ばに」に変更されている。
- 52 Hippolyte Taine, *Voyage aux Pyrénées*, Paris, Hachette, 1858 : イボリット・テーヌ『ピレネ紀行』杉富士雄訳、現代思潮社、1973年、古典文庫。
- 53 Jean Cassou, (Du voyage au tourisme), *Communications*, Paris, Seuil, N° 10, 1967, p. 25.
- 54 Erik Cohen, "Toward a Sociology of International Tourism", *Social Research*, 39 (1), 1972, pp. 164-182 : 安村克己『社会学で読み解く観光—新時代をつくる社会現象』学文社、2001年、pp. 44-45.